

博士學位論文要約

論文題目： 竹田からくりの研究

氏名： 山田 和人

要約：

竹田芝居は、道頓堀で寛文2年（1662）に旗揚げ興行を行い、代々竹田近江を名乗り、からくりと子供芝居の打ち交ぜ興行を行ってきた。ただし、これ以前にすでに興行は各地で行われており（本書第8章第4章）、道頓堀での旗揚げがこの年であった。近世中期に一座が退転するが、それ以後も竹田縫之助を名乗って、幕末から明治に至るまで興行を続けた。大坂に来たら、竹田芝居を見るべしという人気の背景には、入場料が十文程度と安価であったこともあり、子供役者の芝居とからくりを両方楽しむことができたのが大きかったのだろう。からくりの演目も100を超えるのではないかと推定される。また、琉球使節も竹田からくりを好んでいたようであり、江戸時代を通して、からくり人形に対する興味や関心は高かったと言える。なお、江戸下りも4、5回程度ではなく、かなりの数に及ぶのではないかと推測される。江戸興行も大変人気があり、江戸の庶民にも大いに歓迎されていたものと考えられる。さらに伊勢、名古屋を初めとして地方公演も相当数に上ったようである。こうして道頓堀を中心に、各地へと巡業を行い、竹田芝居は全国的に知られていた。また、人形浄瑠璃や歌舞伎、見世物、その他、浮世草子、読本、滑稽本、草双紙、黄表紙、俳諧、俄、落書など幅広い諸ジャンルにも関わりを持っており、からくりを中心とするからくり文化ともいえるべき裾野の広がりを持っていた。

ところが、こうした竹田からくりに関する基礎的な研究はほとんど進んでおらず、たとえば具体的な演目数や、その演技や演出、上演の形態や興行の実態等の基礎的な研究が行われてこなかった。また、竹田からくりの研究のための基礎資料をいかに活用してその演技・演出を探るのか、研究方法も含めて解明すべきことが多い。

竹田からくりの研究が進んでこなかった理由として、竹田からくりの資料整備が遅れているために多様な研究の可能性が狭められてきたことや、文学研究の側では、からくりの研究が人形浄瑠璃の演出研究の補助的な役割を担ってきたために、見世物としてのあるいはパフォーマンスとしてのからくり研究がほとんど行われてこなかったこと、さらに祭礼と結びついた山車からくりを中心にしたフィールド調査と文学研究の側からのアプローチがうまく噛み合わず、両者をつなぐ研究へと展開しにくかったこと等がある。

また、竹田からくりの現存事例が少なく、演技や構造を把握することが難しかった。本書で取り上げた、愛知県半田市亀崎に伝承されている「傀儡師」や「布晒し」はその意味で貴重な事例と言える。こうした事例をさらに探索し、具体的な竹田からくりの演技や演出を探っていくことも重要である。

元来、からくり研究には学際的な側面があり、科学技術史や工学分野の研究からのアプローチ等もあるものの、それらが技術もしくは技術史に偏っており、文化として研究していく総合的・学際的な研究が進展してこなかった。実際の竹田からくりは、近世を通して、道頓堀に限らず江戸や地方興行も行っており、周辺の文学、歴史、美術等の諸ジャンルにも関わっている。いわばからくり文化とも言うべき位置を占めている。そうした意味においても、文化研究としてからくりをとらえ直す必要があるのではないかと。

そこで、本書では、以下のような構成で、からくり文化として竹田からくりをとらえるという視点から、竹田からくりに関する基礎的な研究を行うとともに、各論で、竹田からくりの演

技や演出の動態を明らかにするために、絵画資料を用いて、多角的・多層的にアプローチする方法論についても問題提起したい。

第1章第1節では、愛知県半田市亀崎田中組に伝承されている「傀儡師」と竹田からくりの絵画資料「傀儡師」との比較検討によって、竹田からくりの演技や演出を明らかにできる可能性を提示した。からくりの演技は、人形とからくりの構造によって生み出されるが、「傀儡師」を分析することによって、竹田からくりの演技と構造を知ることができる。第2節、第3節では、竹田からくりの演技や演出を知る上で一等資料である田中組の「傀儡師」を詳細に調査・分析して、それぞれの人形及び舟、箱等の動態と構造を明らかにした。

第2章第1節では、からくり研究においては、人形や装置が瞬時に変化していく演技の動態を把握しなければならないために文献資料の中でもとりわけ絵画資料の占める比重が大きくなるため、からくりの動態把握のためには絵画資料の収集・分析が不可欠である。従来、竹田からくり関連の基礎資料ともいべき絵画資料の調査・整理・集成の作業は国文学研究の側でもほとんど試みられなかったので、ここでは私に調査・収集してきた資料の整理を試みた。

第2節では、竹田からくりの人形の動態を把握するための研究資料として、絵画資料が重要な役割を果たし得る可能性を指摘した。また、からくり研究の絵画資料としての描法に注目し、吹き出しと二画面連続の描法や複数のからくり台による演出を示す描法を指摘するとともに、絵画資料による舞台演出の研究の可能性についても論じた。

第3節では、竹田からくりの絵画資料の分析によって、人形浄瑠璃の舞台演出を探ることができる可能性について、元禄期の宇治座の『丹州千年狐』の山伏人形のからくり注目して、それが竹田からくり「人間五常の臺」と同種のからくりであること、さらにこのからくりが掲載された赤本『ぎおん大まつり』の挿絵も含めて比較検討した。

第3章第1節では、竹田からくりの興行の実態を宇和島伊達藩の家老桑折宗臣の日記を手掛かりに、寛文、延宝期の竹田芝居の動向を探り、竹田芝居の興行の実態を明らかにした。第2節では、からくりと手妻の舞台について考察した。ここでは舞台に注目して、竹田からくりや子供芝居の演技や演出を絵画資料によって明らかにしようと試みた。第3節では、調査・収集した竹田からくりの絵画資料から演目を整理・集計した結果、百演目を超えることが明らかになった。また、からくりが、ひとつのからくり台で演じられる単独型、複数のからくり台を連動させて演出される複合統合型、複数のからくり台をひとつの演目名で一括りにして上演される複合包括型に分類できることを指摘した。

第4章では、竹田からくりの演技・演出の中に、からくりの本義である瞬間の変化・変相を、文字通り奇蹟・奇瑞としてとらえ、素材となった伝承を舞台化したからくりの動態を探った。

第1節で取り上げた「六どう哥ねんぶつ」は、日暮林清が語る歌念仏の地獄の変相を立体化したからくりであり、絵解きの素材として用いられる掛け幅の地獄絵を動態化したからくりともいえる。第2節では、「懐胎十月図」は、懐胎から出産に至るまでの胎内の変化を表したからくりであり、胎内の変化を真言密教の呪具や人間の身体の変化として表すとともに、出産に至るまでの十月の守護仏の加護の有様を次々と見せた。

第5章第1節では、手妻芸尽くしとしての伊藤出羽の『若水千歳狐』を手掛かりに、手妻芸の動態及びその演技を探っている。第2節では、享保以降の伊藤出羽のからくり子供芝居の興行の実情やからくりの演目について整理している。具体的には伊藤出羽権掾のからくり絵尽しを通して、からくりと手妻の動態や演技、演目について検討を加えるとともに、伊藤出羽権掾の活躍についてもまとめている。

第6章第1節では、田中近江大掾すなわち田中久重は、従来、科学技術史の視点から日本の科学技術の黎明期に活躍した偉大な技術者としてとらえられてきたが、芸能研究の立場から改めて田中近江大掾のからくりを見直した。

第2節では、田中近江の代表作である「弓曳き童子」の着想が竹田からくりにあることを絵画資料によって推定し、吹き矢のからくりとともに巧みな射術の演技と的について指摘している。

第7章第1節、第2節では、「融大臣三日月雛形」と「三笠山春日明神」を具体的に分析し、からくりの動態を探るために謡曲の詞章をどのように関連資料として利用していくことができるのか、謡曲の詞章とからくりの絵画資料を組み合わせるとどこまでからくりの動態を明らかにできるのか、探っている。第3節もからくりと能の関連を、「道成寺」を素材として明らかにしようとした。また、琉球使節が見た竹田芝居「道成寺」が、沖縄の組踊「執心鐘入」の成立に深くかかわるのではないかという仮説を提示している。

第4節では、浮世草子『太平色番匠』『儻偶用心記』の挿絵と記事にからくり研究の立場から考察を加え、ここで取り上げた浮世草子の記事・内容は、その当時のからくりの実態を推定する上で貴重な資料たり得ていることを明らかにした。第5節では、式亭三馬の滑稽本『早替胸のからくり』と『人心覗からくり』の挿絵に、竹田からくり「傀儡師」が趣向として取り込まれており、そこには作者のからくりについての興味と知識に基づいた滑稽本としての趣向の多様性を見出すことができることを指摘した。

第8章では、竹田からくり関連の資料を紹介している。第1節では、万治年間の竹田芝居の興行の実情を伝える資料として、西末吉家の文書のなかの「長井宗左衛門長重覚書」と「土橋宗静日記」を紹介している。これらは、万治2年（1659）5月に竹田近江が近江少掾を受領した翌年3月の記録であり、竹田芝居の最も古い興行記録と言える。第2節では、寛保元年（1741）に竹田近江大掾清英が前年に近江大掾受領披露興行のために江戸下りした時の評判を当て込んで、役者評判記『役者披顔桜』（寛保2年3月）の「江戸三芝居惣役者目録」は「見立竹田狂言からくり名尽」の趣向を構え、それぞれの役者を竹田芝居の演目に仮託して評していることを指摘した。第3節では、稀書複製会叢書本の『大からくり絵尽』と同版の国会図書館本『竹田新からくり』を紹介している。従来、『大からくり絵尽』が『竹田新からくり』という書名であることは指摘されていたが、国会図書館本がそのことを証しており、同書が題簽、脇方簽も備えた資料であることを示した。第4節では、寛政2年（1790）刊と推定される番付を紹介しており、寛政年間の竹田芝居の江戸興行の実際をうかがえる貴重な資料であることを指摘した。第5節では、旧稿の「竹田からくり『傀儡師』について」以後に見出された「傀儡師」の絵画資料を紹介している。第6節では、東京国立博物館所蔵の竹田からくりを当て込んだ双六を、竹田からくりの絵画資料によって検証した。その結果、そこに描かれた画像は竹田からくりの絵画資料とほぼ一致しており、こうした遊技関連資料も竹田からくりの研究資料として貴重であることが明らかになった。

本論文では、竹田からくりの研究の方法について問題提起することもひとつの課題であった。そこで、竹田からくりの基本資料である絵画資料と現存からくりの比較を通して、かつての竹田からくりの演技・演出を探る方法としての可能性を、「傀儡師」と「布晒し」を具体例として検証した。そこで、絵画資料と現存からくりの詳細な比較検討によって、竹田からくりの動態を推定することができることを証明した。現存からくりの調査によって従来失われていた演技や操作方法等が明らかになるとともに、絵画資料の資料価値について詳細に検討し、その信憑性について検証できた。これによって竹田からくりの演技や演出を探るための方法論としてひとつの典型例を提示できたのではないか。さらに、竹田からくり研究の基礎資料は、からくりの絵本、絵尽し、番付等の絵画資料であり、それらを精査することによって、からくりの動態を把握できる可能性を示すことができたのではないか。

また、ここでの絵画資料は、からくりの絵本や絵尽し、番付等に限らず、他ジャンルの挿絵等の場合もある。「人間五常の臺」の場合、古浄瑠璃『丹州千年狐』の挿絵や赤本『ぎおん大まつり』の挿絵にも同種のからくり人形が描かれており、ジャンルを超えた資料を一コマずつつなぎ

合わせることによって、からくり人形の演技が見えてくる。そうした意味で、からくり研究にとっては、直接上演の資料となるからくりの絵本、絵尽し、番付等に限らず、幅広いジャンルの資料を調査・収集・整理することによって、からくり人形の演技や演出を遡及的にとらえることができる可能性がある。

竹田からくり研究においては絵画資料が研究の基礎的な資料となる。そのためにからくり関連の絵画資料の悉皆調査と集成が必要であり、それによって竹田からくりの演技・演出に関する研究が大きく進展することが期待できる。本書第3章第1節でまとめた絵画資料のリストは、そのための中間報告であり、今後の調査を踏まえた集成を急ぐ必要がある。

竹田からくりにおける絵画資料の重要性について触れてきたが、からくりの絵本、絵尽し、番付等を整理していくことで自ずと竹田からくりのレパートリーも明らかになっていく。ただし、からくりの演目名については、同じからくりであるにもかかわらず、別の演目を付ける場合もあり、別称を持つことがある。そうした事情を踏まえて別称であることが確認された場合、同一演目としてカウントする必要がある。また、複数の演目が一つの演目としてまとめられる場合もあり、その場合は個別の演目名と包括する演目名も併記するなりしておく必要がある。そうした処理をした上で、絵画資料に収められている演目を基本として演目名を確定していく。そうしたプロセスを経て、竹田からくりの演目をカウントすると、約102演目となる。さらに他の番付類も総合すると、100演目を超えることは確実である。ここに掲載した演目リストは、さらに増補・追加し、総合的な演目リストの作成に今後も取り組んでいきたい。

こうした竹田からくりの演目リストの作成とともに竹田からくりの興行年譜の作成が急がれる。絵本、絵尽し、番付、日記・記録等を参照して、竹田からくりの興行の実態を時系列的に整理し、地方巡業も含めた竹田からくりの興行を総合的に把握していくことも今後の大きな課題である。

なお、竹田からくりの演目を各論としてそれぞれの演技・演出を明らかにしていくことによって、その卓越した技術と作者の構想力が浮き彫りになっていくだろう。そして、竹田からくりの演目が近世の他の文芸や演劇等のジャンルに大きな影響を与えていることを探る手掛かりになるだろう。今後もこうした視点からアプローチしていきたい。

また、竹田からくりの研究を通して、近世の人形浄瑠璃や歌舞伎の演技・演出研究を推進する具体的な手がかりが得られ、近松の作品分析にも新たな問題提起のできる可能性がある。これについては今後の課題としたい。

主な引用文献・参考文献：

- 『竹田新からくり』国立国会図書館所蔵 宝暦8年刊
- 『機関千種の実生』都立中央図書館所蔵 明和4年刊
- 『若楓東雛形』都立中央図書館所蔵 明和4年刊
- 『竹田新からくり』早稲田大学演劇博物館所蔵 宝暦末～明和初め頃刊
- 『機関竹の林』国立国会図書館所蔵 宝暦10年以前刊
- 『竹田大唐繰』大東急記念文庫所蔵 安永6年刊
- 『花艳末広扇』パリ国立図書館所蔵 『機関竹の林』に近い時期刊
- 『家土産竹の林』早稲田大学演劇博物館所蔵 宝暦10年刊
- 『竹田大からくり双六』東京国立博物館所蔵 寛保元年か
- 山崎構成『曳山の人形戯』（東洋出版株式会社、1981年11月）
- 土田衛・須山章信『歌舞伎絵尽し年表』（桜楓社、1988年2月）